

## 私の土地

A 駅とK 駅の間

K 駅に向って線路の左側

つまり東側なのだが

そこに恰好の土地があった

平坦な五百坪ばかりの土地で

一見して牧草地風だったが

周囲の松林や麦畑に調和して

一幅の水彩画のようだった

私は朝夕の通勤電車の窓から

その土地を眺めるのが好きだった

その土地に朝もやが立ちこめていた日

蝶が舞っていた日

陽炎がもえ立っていた日

夕立に打たれていた日

落葉が敷きつめていた日

そして 白雪に覆われていた日

私はこよなくこの土地を愛した

そしていつしか

この土地は私のものになっていた

私はこの土地に

広大な邸宅を配してみたり

内心 些か良心がとがめて

雨露をしのぐに足るだけの

掘立て小屋を配して

晴耕雨読の日々を想ったりした

ところが ある朝

例によってその土地に眼をやると

重大な異変を発見したのだ

「〇〇社有地」と特筆大書した

原色の大看板が まるで盗人のように

あの土地のど真ん中に

突っ立って私をへいげいしている

いらい私は ついに

この土地に眼をやることがなかった